

シンポジウム 「新しい人文学の地平を求めて —ヨーロッパの学知と東アジアの人文学—」 開会の辞

李 成 市

Opening Comment

Sungsi LEE

本日はシンポジウム「新しい人文学の地平を求めて—ヨーロッパの学知と東アジアの人文学」に参席くださり、洵にありがとうございます。

冒頭から私事にわたり恐縮ですが、私は本年(2014)9月まで文学学術院長を務めておりました。在任中の本年7月に、幸いにも代表者として申請しておりました「私立大学戦略的研究基盤形成事業」に採択されました。この研究基盤形成事業の構想調書を作成する際には、本日の主催者であります早稲田大学総合人文科学研究センター長の海老澤衷副学術院長や、シンポジウムのコーディネーターを務めてくださっている甚野尚志先生を始めとする文学学術院の同僚と、申請に相応しい研究テーマを4ヶ月にわたり検討して参りました。

今この間の経緯を想起しますと、本日も報告くださる安酸敏眞先生が本シンポジウムの予稿のなかで、出版されるや大変に反響のありましたご著書『人文学概論—新しい人文学の地平を求めて』(知泉出版)を執筆される契機が学部長としてカリキュラム改編に取り組みましたご苦心が述懐されていますが、それを拝見して改めて共感するところが少なからずありました。

というのも私は、これまで自分が専門としている研究を中心に物事を考えて参りましたので、学術院・学部の責任者となりましてから、研究・教育に従事している職場の現状や未来について、我がことのように切実に取り組まなければならなくなったことに、とても当惑しました。なかでも受験生の皆さ

んに、パンフレットなどで人文学を学ぶ意義について自分の言葉で語らなければならなくなったことに大きな負担と責任を感じざるを得ませんでした。

さらに、早稲田大学の広報めいたことに言及することをお許し下さい。私が学術院・学部の責任者として全学レベルの会議体で最初に直面したのは、すでに前年の2012年に早稲田大学が創立150周年を迎える2032年に向けて、大学の中長期計画であるWaseda Vision 150というマニフェストを掲げ、記者発表を行っていたということであって、学術院としてもこの将来構想の実現が必須の課題になっていたということでした。

このマニフェストは、具体的に13の核心戦略と70以上におよぶプロジェクトから構成されており、しかも難儀なのは達成目標の中には、現在の国会議員選挙でも各政党が忌避している数値目標が掲げられていることです。たとえば、2032年には、全学生の2割は留学生とする。全教員の2割は外国人ないしは外国で学位を取得した者とする。全授業の5割は、外国語の受容にするというような具体的な数値が掲げられています。

早稲田大学の建学の理念(教旨)は、一に「学の独立」、二に「学問の活用」、そして三に「模範国民の造就」ですが、先ほどご紹介したVision 150の具体的な数値からもうかがえるように、この最後の「模範国民の造就」の「国民」は「地球市民」に止揚させて、早稲田大学は世界に貢献するグローバルな人材を育成する世界の大学を目指そうというので

あります。

このようなマニフェストを公にしたからには、早稲田大学は、この目標に向かって日々変革が迫られるのですが、それはとりもなおさず、私ども文学学術院での研究・教育は、そのような目標に向かって、どのようにあるべきかを自分たち自身の問題として取り組まなければならなくなったのであります。

私はこうした課題に、人文学の研究・教育に携わる文学学術院として取り組むに際し、3つのポイントがあると考えました。第一に、われわれが携わっている人文学は、19世紀以来、日本のみならず、世界的にも国民意識形成に寄与するものとして発展してきましたが、国民国家が衰退する中で、そのような人文学の役割はすでに終えたのではないかという認識です。これは英国のビル・レディングズが1996年に『廃墟の中の大学』で説得力ある事例をもって指摘したことであります（日本では2000年に翻訳書〔法政大学出版部〕が刊行されましたが、深刻なことに、この著作の冒頭で、大学が「廃墟」となった表象として揶揄的に著者が用いた「エクセレンス」（卓越性）という言葉がこれ以後、むしろ大学の評価を示す語彙として日本で盛んに用いられるようになり、現在に至っています）。

第二に、人文学のみならず、世界の大学もまた、19世紀以来、近代国民国家、国民意識形成に寄与してきた事実であります。つまりは、大学はネーション・ビルディングと共に歩んできたという認識です。これは吉見俊哉氏が2011年に『大学とは何か』（岩波書店）という著書で明確に指摘したことでありますが、それゆえに、吉見氏は、大学の未来を展望するために、近代の大学の起源としての中世の大学から現在の大学の歴史的な変遷をたどっています。

第三に、東アジア諸国の大学で研究・教育されている人文学は、近代日本の人文学と深く関わっており、ポスト国民国家の時代の人文学は、それらの隣国との協働の下に議論する必要があるのではないかという認識です。早稲田大学は、戦前からアジア諸国からの留学生を受け入れてきましたが、彼らの母国の人文学の創設に大きな役割を果たしており、東アジアでは、人文学の学問的な範型（パラダイム）を共有しているがゆえに、その克服は一国ではなしえないのではないかという問題意識がありました。

おおよそ以上のような三つの認識から、私たちの

研究課題を本日のパンフレットに掲げましたとおり、「近代日本の人文学と東アジア文化圏」とし、そのサブタイトルを「東アジアにおける人文学の危機と再生」とすることにしました。

ここには、東アジア地域固有の共通した課題に留意しつつ、近代日本が先導してきた20世紀の人文学を自己批判的に検証することによって、東アジア地域における植民地主義を克服し、国民国家を基盤にした人文学からグローバル化の時代が要請する新たな人文学へと知的範型の転換を東アジア規模で図ろうとする大きな目標がこめられています。

本日は、安酸敏眞先生、逸見龍生先生、武藤秀太先生をお迎えし、私たちが目指すべき新たな人文学を展望するときの手がかりとして、まず、近代日本が学んだヨーロッパの人文学とはどのような学問であったのか。そして、日本が受容した人文学は現在どのような問題を抱えているのか、さらに、私たちが検証しようとしている人文学を東アジア規模で検討する視座はいかにあるべきか、こういったわたしたちのプロジェクトの今後の展開に不可欠な問題の本質に関わること発表を頂くことになっています。それゆえ、私たちは、本日のシンポジウムを「キックオフ・シンポジウム」と命名させて頂きました。

三先生には、ご登壇をお引き受け下さったことに改めてお礼を申し上げます。また、本日、会場に足をお運びくださった多くの参席者の皆さんに感謝申し上げます。三先生のご発表に基づく参席者の皆さんとの活発な討論を期待しております。はなはだ簡単ではありますが、以上をもって開会の辞にかえさせて頂きます。ご清聴ありがとうございました。